

再生産としての小説

——奥泉光「滝」を読む——

南 明日香

小説というジャンルの終焉が言われて久しい。そもそも舶来ものの「小説」を日本文学

がどこまで突き詰められたかと考えると、否応無く屋台骨の細さ、あるいは多様さ(?)

が露呈されることになるのだが、そこで要求される文学史の検証等という複雑な問題はおき、仮にいま一人の青年が散文による創作活動を始めたとして、真新しい原稿用紙とようやく手になじみ始めた万年筆というセッティングがアナクロならば、まっさらなフロッピーディスクをとりあえず初期化したところ、とするのもよい。

彼(彼女)は何を書く(打つ)のだろうか。

ロマン派神話の信者ならば、ここで天啓が訪れて手があたかも神の手に操られるかのごとく動き、登場人物が勝手に動き始め云々の幸福な「創作」の物語を描いて見せるだろう。

しかし二〇世紀末の世はそのようにばかりは動かないらしい。

小説を書きはじめのころは誰でも、言葉というものが、あたかも自分の内側から湧き出てくるように感じられるのではないかと思われます。つまり、自分の内部に書くべき何か内容があつて、それが表現にもたらされるといふ気持ちを持つ。わたしもそうでした。きわめて素材に小説を書きはじめたところが、そうやって書いてできたものを見ると、つまらない。ひどく陳腐である、バナルであると気がついたので。

これは作家の奥泉光氏(一八五六年生、「石の来歴」で芥川賞受賞)の講演会での言葉である。「純文学」は可能か(「早稲田文学」一九九四年八月)という題目のもと、

奥泉氏はまず、右のような体験から語り始め

た。しかし氏のバナルならざるところは、「先行して小説というジャンルがあつた」、「小説というジャンルを知っていたがゆえに、小説を書くとした」ことに意識的になり、そうした事態をふまえて二つのとるべき道を想定したことである。

第一の方向は、このパターン化した物語を再生産すること。ひたすら再生産する。(中略)パターン化された物語を再生産していくことにはどんな意味があるのか。これは、ひとことと言うと、暇つぶしになるということ。もし小説というものが真に読み手の暇つぶしになるとしたら、これは大変なこと。わたし、奥泉光という作家は、本格的な暇つぶしを提供せん、と考えています。

では、どのように。と「読み手」は思うで

あろう。そこで「小説の再生産」のよき見本を奥泉氏の作品に見いだしたので、氏にかわつて（というのはおこがましいが）紹介したい。

「滝」（「すばる」一九九〇年四月）は文庫版の裏表紙の解説によれば、「奥日光連山で山岳修行に挑む五人の若者の、肉体と精神の限界に立たされる厳しい試練と、組織をめぐる昏い畏を描いた作品ということになる。頁を開くと「開祖」「老師」「一般信徒」、それに「神人合」「神氣充溢」「襖被」といった言葉が、多用される漢語の中にもものものしく登場させられている。

しかし五人の若者のうちカリスマ性を持つ一八歳の中心人物の名前が片桐勲で、その異父兄弟とひそかにささやかれる一六歳の少年の名前が松尾貴彰であること、そして何よりも「滝」の表題に注目すると、物語は別の顔を見せることになる。すなわち

「又、会うぜ。きつと会う。滝の下で。」

と、一八歳の松枝清頭が今際のときに言った言葉、滝に打たれながら本多が飯沼勲を見て思ひ出した言葉が、「滝」の再生産性を浮かび上がらせるのである。この小説、三島由紀夫の『奔馬』（新潮社一九六九年二月）は、

今もって小説という虚構の「現実」を、文字を通して共有する喜びを、われわれに伝えてくれる。道ならぬ恋に命を落とした清頭は剣道の名手にして「昭和の神風連」になるべき飯沼勲に転生した。勲は軍部、皇族をも巻き込んでのクーデターを計画するが頓挫。出獄の後、周囲の裏切りと組織の駆引きを知った勲は、単身暗殺を決行。直後に断崖の上で腹に剣をつき立てる。『奔馬』を含む『豊饒の海』の転生の物語は、最終巻で尼僧の一言によつて無化され、一挙に崩されてしまう。またその後で三島自身の自決という更なる物語が繰り広げられたのは、周知の事実である。この全き結末を見た物語を、奥泉氏はどのように再生産したのだろうか。

「滝」での山岳修行とは、若者組の夏季錬成合宿の仕上げの「霊場たる山中七ヶ所の社を巡礼」で、そこに設けられている一二本の榊の枝を抜き、先に取り付けられた紙垂が白ならばそれは吉で、「邪気の破われ神氣充溢の証拠」となり、黒であれば滝において「清めの行」をなさなければならぬ。滝も七ヶ所にあり、「菅の瀧」から「参の瀧」までは人の滝である。片桐勲の率いるグループは、前日の剣道の試合に優勝したことから、一二

のグループの先駆けとなって出発した。ところが勲の抽く神籤は凶を示すばかりである。順調に行けば一日半の行程で済むものを、滝まで戻れば道なき道を何時間もかけてやり直さなければならぬ。心身の疲労でメンバーは打ちひしがれ、最年少の太郎は発熱する。しかし勲の端正な微笑は乱されない。物語の中で、勲の微笑の美しさはひとつ年下の岩瀬裕矢からも度々称賛される。やがて読者は、神籤を青年組の岩瀬彦彦（裕矢の兄）と河合が故意に操作していたことがわかる。彦彦は「蟹」と渾名されるその容貌の醜さのゆえに勲の教育係として老師に抜擢されていた。勲は血筋、能力共に秀でており、将来組織の指導者になることが約束されている。彦彦は勲に組織運営の要になる「操作主義」を教育しようとして、端の一本のみを白、あとの一本を黒にセットし、その旨を書いた手紙を勲宛に残して四の社を河合と共に後にした。けれども勲は手紙を読みながらも黒の神籤を抽いた。五の社でも。微笑を崩さないままで。彦彦は勲の純粹さの前に完敗したと思う。いや、そもそもこうした企てもみな、勲への恋心からのものであったことに気付く。六の社も七の社も神籤は総て白。そして七の社には自分の

勲への思いを率直にしたためた手紙を置こう、と達彦は決断する。

ここまでならば何やら小説というより少女漫画的な（むしろ嘲笑のためこの形容を用いている訳ではない）筋立てだが、ここで物語は自ら瓦解のための運動を始める。

「五の瀧」の前で若者たちの疲労は頂点に達した。だがここで「靈魂を揺さぶって邪を祓い、靈力を呼び込む」ことをしなければならぬ。そのとき松尾貴彰が「こんな馬鹿らしいことにつきあってられない。」と叫んだ。

物語の中で松尾は、勲の盾の裏表のような役割を持つ。『奔馬』で脆弱な清頭と剛毅な勲が資質的に対照的であったように、松尾は弱くわがままでその出生の暗い秘密からも、勲に現れて来ない陰の部分を一身に引き受けている。達彦はそんな松尾を勲の代わりに自分の「恋人」にしていた。その松尾が修行の馬鹿馬鹿しさを突くのである。青年組の「操作主義」や先に書かれた一般の行楽客の存在以上に、「滝」をめぐる物語が苛酷であるだけに一層欺瞞性が暴かれるのである。

物語の屋台崩しはまだ続く。

仲間を「六の瀧」に残し、一人で七の社に向かった勲を裕矢が追った。メンバー二人の

死を確認し、修行の中断と救出のサインである黄旗を上げたあとのことである。達彦の計画だと勲はそこで白の神籤を抜き、彼の手紙を読むはずであった。だが勲の姿はない。裕矢が見下ろすと岸下に勲が倒れていた。

勲は死んでいた。近づいて恐る恐る覗き込むと、横を向いていた勲の顔がみるみる咲笑する人のような奇怪な形に歪み始めた。叫び声をあげて転倒した裕矢は岩の上を這った。蟹。無数の沢蟹が顔面に貼りつき死肉を喰らっていた。

達彦の計略も苛酷な野営も仲間内の争いも崩すことの出来なかつた勲の静かな横顔は、ここで無残に食い荒らされることになる。それ自体がこの修行の神性を保証するかのような勲の微笑が歪められることで、秘められた醜さが噴き出して来るのである。

裕矢はかろうじて黒の神籤と共に七の社に残されていた手紙を読む。「左端に黒あり。注意したまえ。」の文字と河合の署名が読めた。河合は物語の中では達彦の「操作主義」とは対照的な役割を引き受けていた。薬学部に在籍する野外活動の好きな青年といったところである。ところが六と七の社の神籤を白にする達彦が言った時、河合は惜しむよう

な「悪徳に惑蕩する」表情を見せていた。それを「鏡の中の自分の顔」「河合がずっと達彦の中に見ていたもの」と達彦に思わせているのだ。達彦の顔はまた「蟹」となって勲を喰らった。そして結末。黒の神籤を抽いたものは滝の袂を受けなければならぬ。しかし天然にある「七の瀧は濁っていた。」という一文で物語は締めくくられている。滝の下で裕矢は勲を見た。しかし神性がごとごとく否定され、瀧が濁れている以上「滝」をめぐる物語はもう行き場を持たない。純潔とまやかしとの相克をめぐる物語の時代はすでに終わっているのだといわんばかりに、「滝」はいささか性急に内部からの自己解体を推し進めて行ったのである。

二項対立でプロットを操作することを止め、現実世界の再現と批評も放棄して、先行する小説のメタ小説としてのみ小説が存続し得る時代の、最も巧妙な例を「滝」は見せてくれる。ところで奥泉氏は前記の「二つのとるべき道」の二つ目として、これまでの小説の枠組を壊す方向を語っている。「小説」好きとしてはそちらのほうがぜひ期待したいところである。